

# 松本清張記念館

◆館報◆

2004. 3  
第15号

「カメダ」と  
いうのは  
何だろう。



昭和36年7月  
光文社

現在入手できる本  
松本清張全集第5巻(文藝春秋)  
『砂の器』新潮文庫(新潮社)  
『砂の器』カッパノベルス(光文社)

昭和三十五年五月十七日  
から翌三十六年四月二十日  
まで、読売新聞夕刊に連載さ  
れた。

## 目次

- 松本清張の印刷所時代 ..... 2
- 展示品紹介 ..... 5
- 清張原風景「点描」 ..... 5
- 記念館刊行物のご案内 ..... 6
- 探検！清張記念館 ..... 6
- みんなの広場 ..... 7
- 友の会活動報告 ..... 7
- トピックス ..... 8

## 作品 紹介

東京・国電蒲田操車場で男の扼殺死体が発見された。顔をめつた打ちにされた被害者の状況から怨恨説が有力だった。聞込みの結果、被害者と犯人らしき男が蒲田駅近くのバーで目撃されており、目撃者から得られた東北訛りと「カメダ」の言葉を手がかりに捜査がすすめられた。「カメダ」は人名なのか、地名なのか。事件を担当する警視庁今西刑事と蒲田署吉村刑事は秋田の「羽後亀田」まで手がかりを追った。しかし、結局事件は未解決、被害者の身元すら不明のまま捜査本部は解散し、任意捜査にきりかわった。

その後被害者は見込みとはまったく逆、岡山県の三木謙一と判明、東北訛りと類似する方言を使う出雲の亀高で捜査をしたことがわかった。しかし亀高での捜査では三木の善良、純朴な姿が確認されるばかりで、怨恨と結びつくものはなかった。

迷宮入りもささやかれるなか今西、吉村両刑事の執拗な追及は続く。伊勢参りの気ままな旅に出かけた三木が、「明日は郷里に帰る」予定を急遽変えたのはなぜか。彼を死の東京に呼び寄せた手がかりは伊勢にあるに違いない。

三木が伊勢で二度も入った映画館に貼られていた「記念写真」を手にしたとき、今西はそのなかにはじめて犯人を確信した。「この顔こそ、三木謙一を東京に來させたのだ」。後は具体的な証拠固めである。

「点と線」から三年後、清張本格推理小説の代表格である。映画「砂の器」とともに、この一作として「砂の器」をあげるファンは多い。

(中野 吉明)

松本清張の

# 印刷所時代

松本清張は二十代の大半を印刷画工として印刷所で過ごしました。職人となるには遅い出発でしたが、持ち前の能力に、努力で磨きをかけて文字通り「手に職をもつ」ことになりました。印刷所時代の経験は、作品の中で、場面設定や主人公の職業に多く投影されています。

清張にとって長年の職場であった

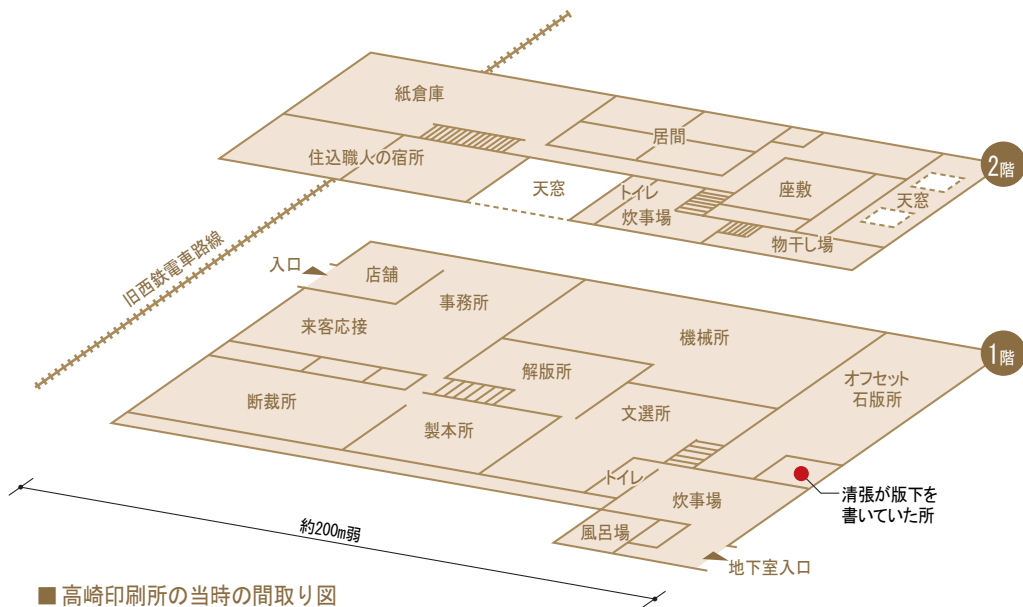
印刷所について、これまであまり詳しく取り上げられたことはありませんでした。しかしこの度の調査で、高崎印刷所の「家族」、ご親戚の方から多くの情報・資料をご提供いただくことができました。紙面の都合上、掲載できなかった内容もありますが、ここでは、ひとまずその概要をご紹介しますと思います。



印刷所の見習工員だった高崎金太郎は、高崎印刷所を創立、一代で北九州一の印刷所に発展させた。昭和11年に金太郎病死。長男寿一郎が当時学生だったため、事業を末弟検助夫婦が引き継ぎ、運営を支えた。昭和19年、強制疎開によってやむなく閉鎖した。(写真は昭和13年ごろ。清張はすでに辞職しており、写っていない。)

## 年譜

- ▼一九一八年(昭和三年・十九歳)  
小倉市(現北九州市小倉北区)の高崎印刷所に石版印刷の見習職人として就職する。この年さらに別の小さな石版印刷所の見習となる。月給は十円程度。
- ▼一九一九年(昭和四年・二十歳)  
三月、友人のプロレタリア文芸誌購読による、ア力狩りの余波をうけ、小倉署に十数日間留置された。父から蔵書を焼かれ読書を禁じられる。
- ▼一九三〇年(昭和五年・三十一歳)  
徴兵検査を受け、筆之種補充兵。
- ▼一九三一年(昭和六年・三十二歳)  
勤め先の印刷所がつぶれ、高崎印刷所に戻る。
- ▼一九三三年(昭和八年・三十四歳)  
福岡市の嶋井オフセット印刷所に  
出向き、半年間修行する。
- ▼一九三四年(昭和九年・三十五歳)  
高崎印刷所に戻る。
- ▼一九三六年(昭和十一年・三十七歳)  
四、五十円と多少職人らしい給料  
を取るようになる。十一月、結婚。  
年末に高崎印刷所の主人が亡く  
なる。
- ▼一九三七年(昭和十二年・三十八歳)  
二月、自営に踏み切る。十月、小  
倉に新築移転した朝日新聞九州  
支社の広告部意匠係臨時嘱託と  
して広告版下を書き始める。



高崎印刷所内の様子

■ 高崎印刷所の当時の間取り図

## 高崎印刷所時代

一方、私のほうも多少職人らしい給料を取るようになった。その頃から印刷をたのむ商店も図案を重視はじめ、私のような者でも印刷所の主人は大事にできるようになった。ほかの職人に知れないように特別の手当をくれるようにもなった。

しかし、相変わらず私のいる所は台所の裏口の傍だった。そこに机を置き、夜遅くまで働いた。漬物の匂いと、風呂水を汲む音とは、私の仕事場から離れなかった。

私の収入が多少ふえたとはいえ、それは余裕のあるものではなかった。私は相変わらずしおたれた着物とちびた下駄で印刷所に通っていた。

その印刷所は、表が古い店によくある畳敷きの帳場になっていて、事務員三、四人が坐っていた。古い商法だが、主人は働き者で、肥えた低い身体をこまめに動かし、各会社を回っては注文をとっていた。いつも真赧な顔をしているので、金太郎という実名があだ名のようなようだった。

主人は工場に帰ると、職人をがみがみと怒鳴り散らす。この印刷所は活版が主体で、石版は付属的なものだった。活版小僧からたたきあげた主人は石版がよく分らないので、多少苦手なようだった。「半生の記」

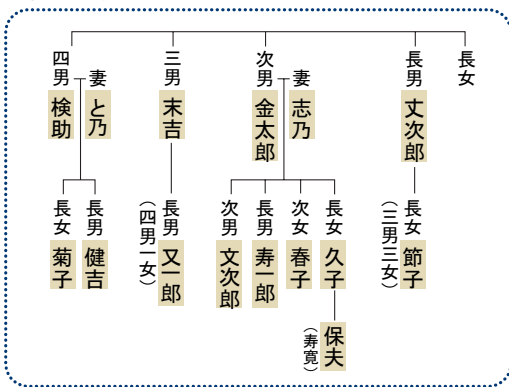
※ここには「旧商法」とあるが、高崎印刷所は北九州で最も大きな印刷所であり、いち早くオフセットを導入していた。

## ようやく見つけた就職先

十九歳の松本清張は、職を失いぶらぶらと暮らしていた。何か手に職を考えると、母を通じて高崎印刷所の見習い職人となった。

画工の見習いといっても師匠もおらず、素人として入った清張は、年下の同僚たちからこき使われた。画工の仕事はなかなか習得できなかつた清張は、小さな印刷所に移って基礎から版下のかき方を学んだ。その印刷所が潰れ、再び高崎印刷所に戻る。

■ 高崎家系図



※金太郎の妻「志乃」と検助の妻「と乃」は姉妹。二夫婦は創業から閉鎖まで工場の二階に同居していた。

## 画工としての松本清張

高崎印刷所を運営していた両親と二階に住んでいた矢鳴菊子さん(藤沢市在住)は、当時、六歳くらいだった。清張は「菊子ちゃん、菊子ちゃん」と可愛がってくれたという。矢鳴さんが、お母様から聞いた話によると清張は、真面目で物静かな腕のいい職人。反面、頑固なところがあり、納得しないと妥協しなかつたそうである。見かけは少し暗い感じで、くたびれた服にドタ靴で、朝日新聞社に入社してからも同じ姿を見かけ「変わってないわね」とつぶやいたという。清張が朝日新聞社に移る頃には腕のいい版下工になっていた。印刷所のほうも引き止めるほどだった。

## 職人仲間とのつき合い

高崎印刷所で共に働いた牧野良雄さんの弟、武さん(茅ヶ崎市在住)は、清張がよく家に遊びに来ていたことを記憶している。活版職人だった良雄さんは大正四年生まれ。清張の六歳年下にあたる。牧野家と家が近く、牧野さんのお母様が清張のぶんまでお弁当を作ったこともあった。武さんは後に朝日新聞西部本社で一緒になったが、間もなく清張が上京し、以後付き合いはなくなった。



後列左から検助、金太郎（二階座敷にて、昭和7年）

## 作家になってからの縁

金太郎氏の長男・高崎寿一郎さん（熊本市在住）は、上京後の清張と次のような縁があった。寿一郎さんのご子息が藤沢市で不慮の事故に遭った際、思い余って松本邸に駆け込み相談した。たまたま在宅していた清張はすぐに懇意の病院に連絡し、無事手術も成功し退院することができた。

金太郎氏の孫にあたる花柳寿寛さん（山口市在住）も、何度か東京の松

本邸を訪れた。松本清張記念館に展示されている再現家屋を見たとき、懐かしさがこみ上げた。日本舞踊の先生をしていた寿寛さんのお母様は、小倉にいた頃、清張に公演のパンフレットをデザインしてもらったことがあった。

赤と黒を使い、「バレエのパンフレットみたい」だったという。上京後も年賀状やお歳暮などのやり取りが続ぎ、そんなお付き合いかから、「自身も昭和四十五年頃に「名取」の保証人になってもらった。

印刷所の二階は主人家族の住居で、家具調度も私の眼には贅を尽くしていた。その十二畳の座敷の真中に紫檀しじもの机を置き、…

「半生の記」

## 嶋井オフセット印刷所時代

私は何とかして一家の生活だけは確立したかった。そのため早く職人として一人前の給料がとれるように焦った。小倉の小さな印刷所には私の腕は上らないので、その頃、九州で一ばん大きい博多の嶋井オフセット印刷所に移った。

この博多の生活は、はじめて親のもとを離れた自由さがあった。給料が少なく、休みの日には映画に行く金もないので、ただ市中をうろつくだけが楽しみだった。

父親からは始終手紙がきた。着替えの時期には、着物を小包みにして送ってきた。母は字が書けなかったから、その中に母のことづけなどがあつた。

博多の素漠さくぼくとした生活によりやく耐えきれなくなつて、私は、五月の初めにまた小倉に戻った。

## 嶋井オフセットでの出会い

昭和八年、清張は高崎印刷所から派遣され福岡市の嶋井精華堂オフセットで見習いとして働き始める。

現在は嶋井精華堂となり所在地も移ったが、戦前は博多区中呉服町にあつた。その場所には嶋井宗室の屋敷跡として石碑が建てられている。

清張が修行した頃はまだ活版印刷が多く、オフセットの印刷所は少なかつた。嶋井精華堂オフセットは九州全域から注文があるような大きな印刷所であつた。ここで能書家でもあり俳人でもある江口竹亭氏と出会う。

清張は竹亭氏を「江口さん」と呼ん

江口 竹亭  
（えぐち ちくてい）  
明治33年1月1日  
佐賀県生まれ。  
平成5年没。



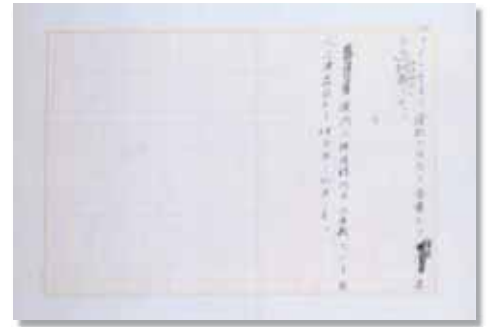
（福岡市総合図書館所蔵）

でいた。図案を書くための文字を習うかたわら、作った句をみてもらうこともあつた。清張の字が美しいことは、手がけた広告や、残された書簡、原稿などどうかがい知ることが出来る。俳句のほうも、「時間の習俗」「巻頭句の女」など句作を取り入れたものや「菊枕」「月光」といった実在の俳人をモデルにした作品が多数あり、俳句への関心が反映されている。

わずかな期間であつたが、江口竹亭氏と清張は懇意となり、交流は晩年まで続いた。

※参考資料「万燈」第十五巻第八号

# 絶筆②「江戸綺談 甲州靈嶽党」



「甲州靈嶽党」は「週刊新潮」に平成四年一月から五月までの十八回、順調に連載された。しかし、清張が四月二十日入院して執筆を中断したまま、ついに未完の作品となってしまった。生前、「自分にとって一代の世話物にした」と語っていたという。連載第十九回の原稿をすでに書き終え二十回目を書いている途中で、会合があると家を出た。机には、中ほどで文字の途切れた原稿用紙が置かれたままだった。物語の始まりは、江戸で暮らす不思議な男・平賀源内を、絵巻物のように遠くから捉え、次第にクローズアップしていくところから語り出される。清張は、源内と江戸の町を生き生きと描いている。「阿蘭陀渡り」がもてはやされた時代、源内は鋭敏に流行を掴み、珍しいもの、人々が求めるようなものをいち早く取り入れ日本に紹介した。エッセナルもその一つである。博覧強記で万事に通じ、行動力のある源内の活

躍は多方面に渡った。「甲州靈嶽党」の中でも、浄瑠璃の脚本書き、葉の命名、発明、鉱山開発などをやってのける源内の姿がある。

連載前の書きで「舞台は甲州がおもだが、江戸も入れる」と、清張は告知している。その構想は「甲斐の国は江戸中期に柳沢吉保が領し、子の吉里が大和郡山に移されたあととは幕府直轄領となった。だが、国内は峻険奇峰の山嶽が連亘し、幕政〔甲府勤番支配〕も届きかねて、依然として神秘の国であった。いわゆる伝奇小説の世界となる」というものであった。しかし遺稿として発表された部分を含め、甲州が舞台となるのは三分の一にも満たない。その代わり江戸や長崎のくだりも、当時の風俗や人物が実に細かく書かれていて、作品の時代について引き込まれる。「のまま書き続けられていたら、どのような展開になったのか…期待どおり「一代の世話物」になったに違いない。

(学芸担当 柳原 暁子)



## 清張原風景

# 点描

## 田中町

「家は田中町に移った。重砲兵連隊のすぐ前に餅屋を出した。」(「骨壺の風景」)



旧住居のあった新町四丁目バス停付近

突然の山崩れにより壇ノ浦の住居を失った一家は、田中町(今日の上田中一丁目)に新しい住居を定めた。大正二年、清張四歳のときである。

明治二十年になると下関は要塞地帯と内定され、部隊及び砲台の創設が開始された。明治四十年には野戦重砲兵第五連

隊、第六連隊が置かれ、大正九年野戦重砲兵第五連隊が小倉北方に転営、残存部隊は下関重砲兵連隊に改称されたという。一家は道を隔てた重砲兵連隊兵営の兵隊や、面会家族めあての餅屋を営んだのである。

七歳(大正五)になると善哉尋常小学校へ通う。「善哉」とは、人材の育成を表し、明治十六年開校、戦災により焼失しそのまま廃校となった。

「私は、小学校二年生のころのうろほえの記憶をまさぐりながら、心当りの地形をさがす。それは園田町という所だった。(中略)田中町から奥小路という市場の中を通過して南へ行く坂道の横にその瓦斯タンクがあり、それを見るときはやんの居る家はもうすぐだな、と脚にはずみがついたものだった。」(「骨壺の風景」)

小学校低学年の清張は、奥小路「赤岸通り」といわれる古い市場を抜けて、住み込みで働く祖母の所へ通った。



赤岸通り



年一回発行の『松本清張研究』は第一線の研究者を網羅し、つねに新鮮な特集を組んでいます。今回の特集は「松本清張の敗戦前後」です。清張は敗戦までの約一年間を衛生兵として軍隊で過ごしました。復員後、清張は家長として懸命に大家族の生活を支えました。朝鮮戦争が始まった時には清張はまだ小倉にいて、アメリカ軍黒人兵の脱走事件に遭遇しました。清張の「敗戦前後」における〈軍隊〉と〈戦後・占領期〉の体験は、多くの清張作品に活かされており、清張文学を理解する上で欠かせない要素といえます。

特集 松本清張の敗戦前後

〈座談会〉戦争体験が作家にもたらしたもの

軍隊篇

城山 三郎、色川 大吉、平岡 敏夫

松本衛生兵の朝鮮体験

南 富雄

衛生兵の〈点と線〉——「任務」と「繁昌するメス」

栗坪 良樹

もう一つの原点——「百済の草」と「走路」

綾目 広治

「遠い接近」の背景——松本清張の軍隊体験

花田 俊典

占領期篇

「日本の黒い霧」の時代認識と評価

藤井 忠俊

——「黒地の絵」と帝銀・下山・松川事件諸作品の資料検証

金子 勝昭

アンケート「日本の黒い霧」——私はこう読んだ

上田正昭、大城立裕、鎌田 慧、小林久三、佐藤忠男、島村 匠、出久根達郎、西木正明、葉治英哉、三咲光郎、村雨貞郎、新藤兼人〈随想〉

論文 「表象詩人」論——あるいは〈詩人〉のオブセッション

天沢 退二 郎

老よしとハルコの探検! 清張記念館

屋外 テラスの巻



きよし んー、いい天気。風が気持ちいいなあ。

ハルコ こんな場所があったのね。ふーん、このまま外に出られるようになってるんだ。

きよし この石段を観覧席にして朗読会をしたり、今後はイベントスペースとして活用する計画もあるようだよ。

ハルコ 記念館の新しい魅力になりそうね。

きよし 僕たちも新しいことを始めないと…。ねえ、そろそろ結婚のことも考えてみないか。うはー♡ ついに言っちゃったよ。

ハルコ え!! 私たち付きあってたの? ごめん…。いきなり言われても、そんな目で見てなかったし。

きよし そんな…。そう思ってたのは僕だけ? あんまりだ。グス

ハルコ ちょっと、泣かないで。記念館の窓から他のお客さんが見てるわよ。



石垣に囲まれた中庭は、これからの季節はとても気持ちいいオープンスペース。喫茶「石の館」にも出入りできます。館内の展示を観たあとはぜひ歩いてみてください。

# みんなの広場

今回は、お寄せいただいたアンケートの中から、皆さんと清張作品の出会いについて掲載しました。

清張作品にのめりこむキッカケとなった作品やエピソードなどが、また、様々な出会いが集まっていると感じました。作品との出会いは人それぞれ違ったものだと思いますが、皆さんもご自分の「出会い」を思い出してみてもはいかがでしょうか？

## わたしと清張作品の出会い

- ・学生時代夜中に友だちから借りた本が松本清張との出会いです。書名は「点と線」で、おもしろいからと借りましたが、ほんとうに読み始めたらすっかりのめり込んで早く他の本も読みたいと、早く夜が明けないかなとまちどおしかったのを覚えています。すぐ本屋に走りました。(40代・愛知県・男)
- ・「点と線」—中学時代にはまり、以降推理小説にはまっていた記念すべき作品。忘れられない。(40代・広島・男)
- ・大学時代に社会学が何かで「松本清張を読む」という講義を受講していました。心も身体も怠けまくっていた当時、こんなに日本の事を案じている人がいるなんてと心あたりました。清張の真摯なモノの見方には片よりがなく、憂いがなく、はげまされたのを思い出します。暇な大学時代に彼の作品に出逢えた事を嬉しく思います。(20代・大阪・女)
- ・「点と線」—20才頃初めて清張さんの作品を読んだのがこの作。時刻表のトリックがおもしろく、それから清張の作品次々と読みました。(50代・福岡・女)
- ・「砂の器」—これが松本清張さんの本にのめりこむ一歩でした。以来、ミステリーにかたよっています。(50代・東京都・女)
- ・現在53才ですが、中学の頃出会ってからずっと人生の教科書だったような気がします。主人公の女性をお手本にしたり、共感を覚えたり…。(50代・福岡・女)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介します。清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。  
※アンケートは館内にも置いてあります。

## 友の会 活動報告

### ●北九州シネマサロン「天城越え」上映会

(平成16年2月21日(土):参加者32名)

小倉井筒屋パステルホールにおいて、「天城越え」上映会が行われました。北九州シネマサロンは、日本映画を通じて、映画及び映像文化の振興と映像の視点から郷土を学ぶことを目的とする団体で今回の上映会が11回目にあたります。上映前には清張映画音楽のピアノ演奏もあり、大変好評でした。



### ●第5回清張サロン

(平成16年2月27日(金):参加者17名)

「天城越え」をテーマに清張サロンを実施しました。小林慎也先生を講師にお迎えして、参加者がそれぞれ感想や意見を述べ、先生がそれに対して解説やコメントを加えていく形式で、和やかな雰囲気の中、活発な意見交換が行われました。映画「天城越え」の上映会(北九州シネマサロン)直後ということもあり、映画と小説との対比も話題に上るなど、数多くの意見・感想が出され大変盛況でした。



会員募集中!

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

## 作家 宮部みゆきさんから [アンケートのお願い]

■あなたのお好きな松本清張作品を教えてください。

いま、作家の宮部みゆきさんが、ホームページで「好きな松本清張作品」アンケートを募集しています。募集期間は2004年3月19日から5月20日までで、所属する大沢オフィスの公式ホームページから応募できます。抽選によるサイン入り本のプレゼントなどもあります。詳しくは、ホームページ「大極宮」をご覧ください。

<http://www.osawa-office.co.jp>

## 2003年度・ドラマ化された清張作品

2003.9.16  
[21:00~22:54] 松本清張サスペンス特別企画「霧の旗」 TBS

2003.12.3  
[20:54~23:18] 松本清張特別企画「喪失の儀礼」 テレビ東京

2004.3.23  
[21:03~23:24] 清張特別ドラマスペシャル「黒の回廊」 日本テレビ

2004.3.24  
[21:00~23:24] 清張特別ドラマスペシャル「鬼畜」(再放送) 日本テレビ

2004.3.27  
[21:00~22:51] テレビ朝日開局45周年記念  
土曜ワイド劇場「証言」 テレビ朝日

2004.1~3  
[21:00~21:54] 「砂の器」  
TBS



### ●編集後記●

気がつけば暦も3月になり、記念館周辺の桜も満開、春を待ったように人が多くなってきました。

それにしても清張先生が勤めていた高崎印刷所の写真が出てくるなんて驚きでした。

今後とも、新鮮な話題提供に努めていきます。

(中野 吉明)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093(582)2761  
FAX 093(562)2303  
<http://www.kid.ne.jp/seicho>  
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30~午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日~12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス J R: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城第二下車)  
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

入館者

## 60万人達成!!

平成15年12月12日、記念館の入館者が60万人を超えました。

幸運な60万人目となったのは福岡市東区の高江弘美さん、お友達と一緒に入館でした。藤井館長とくす玉を割り、認定証と記念品を受け取ったあと、「びっくりしました。これを機会に清張さんの作品を多く読んでみたい」との感想を述べられました。



高江弘美さん(右)と藤井館長

## 特別企画展の延長

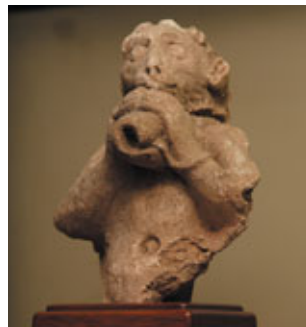
『松本清張「火の路」誕生秘話 —古代史家の往復書簡を中心に』

【開催期間】 平成16年1月16日(金)~5月5日(水)

【会場】 松本清張記念館 地下企画展示室

【入場料】 ●一般:500円 ●中高生:300円 ●小学生:200円  
※常設展示観覧料に含む。

【展示構成】 ①『火の路』へ ②通信講座・『火の路』教室 ③資料室・書庫から



ハツダの塑像



酒船石



清張書簡

